

斜 視 眼

小名濱漁業組合長

立花 雄 七君

堂々たる體格——加ふるにてもらいたい、而すれば君
 眞白な若白ハツ——此れが實力と言ふものもハツ切
 でも一人前は勤まる、君はりと知れて一層たのもし
 漁業家として知られた八島最近の君の行動言辭は十分
 屋の主人であり、若い時かの用意があり、如何なる重
 ら今日迄毎回の町議である大事を委しても、危氣少
 あらゆる方面の事業へも又も、將に人間としての
 町の名譽にも大底タズ完成のイキに達して居るこ
 わり町の重鎮として納まつ、數十年來と爾後永遠に多
 て居る、君を批判するなれ事多端たるべき我小名濱
 は開ラン。コッ脱に過ぎるのの中心人物として君の力を
 威がある、君に除外が出来候つ事、大なれば自重自愛
 得るなれば信念の爲めにはして水産界の爲めに精進さ
 斷乎たる切味を露骨に出したい。

鯉 漁 場 調 査 報 告

第三航海 自五月十一日 磐城丸

本船は五月十一日午後五時小名濱出帆す、此の航海中
 の潮流北東ユルヤカなり、(イ)の海區にて五月十三日
 午後一時より同一時三十分に至る間に鳥付の魚群に會
 ひ四五百尾大の「カッラ」六百尾釣獲す、エ付良好なり
 しも魚群薄し、「ロ」海區にて同月十四日午前十一時よ
 り同十一時三十分に至る間に、鳥付の魚群に會ひ三四
 貫大の「メバチ」十二尾釣獲せしも魚群ウスでどこか
 くして、エ付不良なり、「ハ」の海區にて、五月十六日
 午後三時鳥付の魚群に會せ、三四貫大の「メバチ」
 「メバチ」二十五尾釣獲せし、「ハ」の海區にて、エ付不
 良にして此の附近、「ギョゴン」相當に見ゆるもエに付
 せず、「ニ」(「ロ」)の各點にて圍まれたる圍内の
 海區附近に於て、漁船は好漁をなしたるもの多し、而
 して「メバチ」「メバチ」は北東方に移動し其の
 速力も相當速きもの、如し、「チ」の海區にて同日午後
 一時鳥付「メバチ」五、六百尾の「カッラ」百尾釣獲せ
 り、「リ」の海區にて同月十九日午前四時出来「メバチ」
 「メバチ」三十尾釣獲す、「メバチ」三十尾、同月
 二十日午後八時三十分、小名濱に歸港す

紅 燈 の 影

生れが石岡町で、ウツ湯を
 使つたのが、猶且石岡だけ
 れど、御歳ワヅカ六才にし
 てより二十才の現今まで、
 江戸は本郷で磨き上げた
 けあつて、ドコか江戸ツ子
 らしい、キビシクした所
 ある、不二家のとん子さ
 彼の妓の可愛らしい、ニ
 と笑へば人を斬るの、上
 州一の大親分、國定忠次
 が、ニコと笑へば、お客の
 心ソツをトロカスのは、と
 ん子姉さんを差しおいて誰
 もあるまい、破顔一笑、彼
 の女のニコリに出會つたら
 最後、どんな堅僧でも必ず
 ニコロとせすに居られない

甘 しい 御菓 子
 の 野 米
 店 子 菓 屋 み と く

良 品 廉 價 賣 將 略 商 店
 店 商 屋 文
 港 古 町 濱 名 小

知らずや、當のミーさん今
 頭は何處の空で、プーカド
 ン／＼チヤズで踊つてリキ
 ムで裏けて、居るのやら
 テモサテモ男つて罪つくり
 な奴さ、

酒 は 六 番
 清 水 屋 本 店
 小 名 濱 町
 (電話六番)

和 洋 銅 鐵、金 物 問 屋
 釜 屋 商 店
 平 町 五 丁 目
 電話九番 一三九番

磐 城 水 産 工 業 株 式 會 社
 社 長 小 野 晋 平
 總 支 配 人 福 尾 伊 太 郎
 小 名 濱 町
 (電話六六一二〇番)

福 島 縣 平 町
 磐 城 共 濟 病 院

藥 品 賣 藥
 小 野 藥 店
 寶 屋 號
 小 名 濱 町 古 港

小 名 濱 中 町
 洋 雜 貨 品
 仕 立 物
 村 上 吳 服 店
 良 品 廉 價 賣 ば 村 上 の モ ッ ト

船 具 附 屬 品 一 般
 機 械 油
 小 名 濱 水 産 株 式 會 社
 (電話四十三番)

縣 立 回 春 園 一 手 御 用
 理 想 的 殺 菌
 全 乳
 小 名 濱 町
 す ま や 牧 場 部
 (電話一〇番)